



都市の「地層」を読む

木村 周平 (きむら しゅうへい)

東京大学大学院総合文化研究科

過去に覆われた街 イスタンブル

都市の魅力はそのダイナミズムにある。新しいものが次々と生み出され、それがすでに存在していたものと混じり合い、独特の風貌を作り出す。一五〇〇年を超える歴史をもつ街イスタンブルは、アジアとヨーロッパの中間地点に位置するというユニークさと、オスマン帝国時代の美しいモスクで知られるが、そ

人口増と高層化の二〇世紀

第二次世界大戦後には急激な人口増がこの街を襲った。イスタンブルの土地は黄金だといわれ、一九二三年の共和国成立時には一〇〇万人に満たなかった人口は、それから八〇年ほどで一〇〇〇万人を超えることになる。そうした過程で、木造に代わって、手間がかからず、また建物の高層化が可能なコンクリートという材料が大々的に導入される。増え続ける住宅の需要によって、部分的には計画的に、しかし大部分は無秩序に地面を建物で覆い、またその範囲も次第に広がっていった。この変化は火事の危険を減らしたものの、五〇〇年前同様、揺れによる地震のリスクを高めた。イスタンブル市では最近、消防から独立して災害に対応する課が設置されるに至っている。

都市にはあちらこちらに亀裂が入り、古い「地層」が顔をのぞかせている。それによれば、そこから社会を見直すことも、都市におけるフィールドワークのひとつの醍醐味であろう。

ロティのころの中心地には今もその面影はあるが、すでに寂れてしまっている

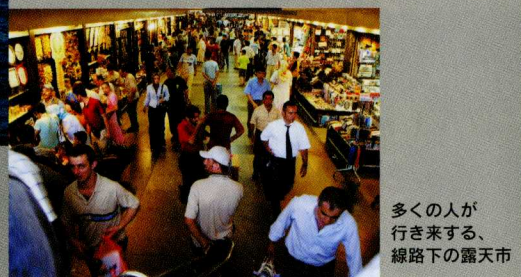


今の繁華街にはかつてヨーロッパ人が住んでいたため、いくつも教会が残っている

旧市街。オスマン帝国時代の建築が売店として使われている



北部のオフィス街。高層ビルが立ち並び、もはやこの街がわからない



多くの人が行き来する、線路下の露天市



ボスポラス海峡から見るイスタンブル新市街。オスマン帝国時代、ここは外国人の居住地域だった

ために、街を歩きながら、一九世紀のフランス人作家ピエール・ロティの『恋物語「アジア」』を読んでみる。そこには今からおおよそ一五〇年前の騒々しさ、エキゾチズム、かつての繁栄の記憶が瑞々しく描かれている。オスマン帝国の繁栄期は、ロティがいた時代よりもさらに三〇〇年遡らなければならず、一九世紀末、イスタンブルはすでに「過去」に覆われた街であったのだ。

火事との戦い

かつての中心街は今、鉄筋コンクリートの建物群にびっしりと覆いつくされている。街のなかに、ちらほらと古い木造建築が残っているのが見えるだろう。ロティの文章を追えば、この地区は細く入り組んだ路地と、出窓の張り出した木造の家々に満ちている。当時は木造住宅がそこを占めていたのだ。さらに「アジア」では、地区のひとつが大火で消失してしまう姿も描かれているが、大火事は現在のイスタンブルからはほとんど想像できない。ロティと我々のあいだのどこかで、人びとの暮らしの場は二階建ての木造建築から鉄筋高層アパートへと移行し、それとともに、火事との長い戦いも次第に過去のものになったからである。

五〇九年、オスマン帝国下のイスタンブルを「クチュック・クヤーマット」とよばれる大地震が襲う。直訳すれば「小さな(宗教的な意味での)世界の終焉」という地震の名前から、衝撃の大きさがしのばれる。地震の揺れによる被害を抑えるための木造建築が別の災害を招いてしまふことになったのは皮肉なことである。

これに対しイスタンブルではふたつのことがおこなわれた。ひとつは、一七四四年にイエニチエリとよばれる軍のなかに創設された消防隊である。当時の消防とはポンプ(トゥルンバ)で水をかけて火を消すもので、消防はポンプ屋(トゥルンバジユ)とよばれた。そしてこのトゥルンバジユは一八二六年のイエニチエリ廃止のち、各地区の住人が担うことになるが、これは日本というなら町火消であろう。彼らは荒くれ者が多く、統制がとれなかったため大火に対して役に立たず、一八六〇年には再び行政の下に置かれた、という話もある。

もうひとつは都市計画である。すでに一六世紀のスルタンたちは、火災の延焼を防ぐため、家の庇を小さくしたり、消火槽を設置したりするよう指示していた。一九世紀なかごろからは都市の治安維持と防災対策のために、道路拡張や広場の建設などをおこない、また火事を出した地域では木造建築を禁止したりもした。さらに一九五〇年代の大規模な都